

「海と老人」アーネスト・ヘミングウェイ― 作 斉藤スミ子 '16.8.20

I-文庫より

キューバの老漁夫サンチャゴと少年の交流を描いた短編小説である。

ヘミングウェイは61歳まで生きたアメリカの作家でこれはその10年位前に書いた海洋小説である。ノーベル賞を受賞しているがこの作品が対象になったようだと書かれている。

年老いて長い不漁にもめげず、小舟で大海原に出ていく勇気はすごいと思った。4, 5日間の出来事を単行本にして200ページくらいに書いている。細かいリアルな描写に驚いた。長年の海の仕事のせいか、海の知識も豊かである。カジキは餌を見つけると雄は必ずメスに先に食べさせるという。

何かで読んだ中に、地雷を超えて逃げるとき、まず年老いた父親を行かせる、父は地雷に触れ死んでします。息子はそのあたりを避け逃げ伸びた。このことを思い出し、魚もこんな知恵が働くのかとビックリした。ここでとらえられたカジキの雄は最後までメスのために暴れ抵抗するが最後な海へ消えていきメスのカジキは捕えられた。

「ここに少年がいれば・・・」と何度もつぶやくサンチャゴは老人のさみしさ、体力の衰えを感じわが身にも響いてきた。

サンチャゴは格闘の末1年分の食い口になる巨大はカジキマグロを捕えるが余りに大きくて船に挙げられず、船にいわえて持って帰ることにした。

その帰途、次々船の外にいわえられた、巨大カジキを次々サメがカジキを襲う。狩猟の道具は次々破損し、体力も消耗し手も傷だらけで結局、帰りつくことは骨と頭だけのカジキになっていた。漁師仲間も、カジキの大きさに驚くが・・・。貧しいけれど、少年が手厚い看護をしてくれた。

